

られていたという点について、完全に無視することもできない。「この話の一部はネパールメディア向けに話したことがあるが、ここまで詳細に時系列順に誰かに話したことはなかった」とロカヤ氏は言う。すべてが真実であるという裏付けはとれないが、非常に貴重な証言であることに間違いはない。

引用文献

- 小倉清子. 2015. 「武装闘争から議会政治へ」南
真木人・石井溥編著『現代ネパールの政治と
社会—民主化とマオイストの影響の拡大』明
石書店, 55-90.
U.S. Department of State. 2024. “Executive Order
13224.” 〈[https://www.state.gov/executive-order-
13224/](https://www.state.gov/executive-order-13224/)〉(最終閲覧日 2024 年 5 月 30 日)

にぎやかなお通夜

——残された者への寄り添い方——

佐々木 恩 愛*

ラオスで生活をしていると、葬儀に参加することがよくある。ホームステイ先のお父さんは、仕事柄顔の広い人だったこともあり、しばしば葬式に招かれていた。ラオスでは、人が亡くなると、遺体を自宅に3日間安置し、その後寺院や村の郊外で火葬し、その後、親族が遺骨を骨壺に収めて、墓地や寺院境内に納める [増原 2003: 259]。また、上座部仏教のしきたりに則り、故人の男性家族はその期間だけ出家し、女性家族や小さな子どもは白い服を着る。これらは、上座部仏教を信仰する低地ラオ¹⁾の人々の慣行である。私が参加したのは、遺体を自宅に3日間安

置している家への訪問（通夜）と火葬への参列であるが、それらを通して個人的な出来事ともつながる印象的な経験をした。

お通夜の雰囲気

ある日、お父さんの職場で働く方の家族が亡くなり、私はその方のお通夜に行った。服装はシン（ラオスの伝統的な巻きスカート）であればなんでも良いと言うので、紺色のシンに真っ白なワイシャツを着て行った。故人の家に着き、ご遺族に挨拶すると、棺が置いてある部屋に案内された。棺は綺麗に飾られ、花やお金が供えられていた。ご遺族とお

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) ラオスには数多くの民族が暮らしているが、1950 年以降、全ての民族を居住地の高低によって、低地ラオ、山腹ラオ、高地ラオの3グループに分けられた。現在この分類は公式には使用されていないが、一般的に広く使われる [安井 2010: 19-22]。低地ラオの人々は人口の半分以上を占めるタイ系民族である。

話し、持参した香典や食べ物をお渡ししてから、棺の前で写真を撮った。ラオスでは誰かが亡くなり、Facebook 上でそのことが知られる時も亡くなった直後の顔の写真がそのままアップされる。その知らせを見たり、電話で連絡を受けたり、あるいは通りがかったりした人が次々と会場にやってくる。

火葬するまでの間、故人の家には、昼夜問わず人々が訪れる。この日も、夜遅くに行ったにもかかわらず、家の外にいくつも用意された丸テーブルを囲み、多くの人が料理を食べながら、みんなでおしゃべりをしていた。あるテーブルでは、たまたま同席した同郷出身の人たちが地元トークに花を咲かせていたり、別のテーブルではカード賭博に興じる人々が、風で飛ばされそうになる紙幣を必死に抑えたりしていた。会場には、故人と全く関わりのない、ただカード賭博がやりたくて来ている人もいた。ホームステイ先のお父さんはというと、故人の弟が始めたラオス南部のコーヒー栽培の話で盛り上がり、どのくらいの面積の土地で栽培しているのか、どのように育てるのか、収穫までどれほど費用や時間がかかるのか、根掘り葉掘り聞いていた。ちょうど、お父さんが現在もっている土地で、何を栽培すると一番儲かるのか考えていたところだったのだという。会場の端に置かれたテレビには昔のタイのコメディ映画が上映されていた。お通夜で振る舞われる料理はホテルのバイキングさながら、ビュッフェ形式でいろいろな種類の料理をいくらかでも食べることができた。どのテーブルからも笑い声が聞こえ、訪問者だけでなく、遺族も挨拶を

したり、料理を準備したりしながら笑顔を見せていた。

寺での火葬

また別の日、違う葬式に行った。故人は元大学教員であった。この日も前回と同じように、亡くなった方の家では、学生や教員などの大学関係者をはじめ、生前親交のあった（あるいは通りがかりの）多くの人が訪問し、同じようにたくさん料理を食べ、カード賭博をし、おしゃべりをしていた。家族は家の中の棺の前で、次々とやってくる訪問者と挨拶をし、忙しそうにしていた。

しばらくすると、お通夜の会場にトラックがやってきて、親族の男性が中心になって綺麗に装飾された棺を載せた。出家し、オレンジの布に身を包んだ親族の男性たちが棺と一



写真1 寺の火葬場

緒にトラックの荷台に乗り込み、両端から支えながら寺まで運んだ。ゆっくりゆっくりと進んだ葬送の行進は、少し離れた村の寺で止まった。参列者もバスや車であとを追う。みんなが寺に到着すると、火葬の前に、故人の来歴が読み上げられたあと、経があげられた。その後、参列者は線香と白い紙でできた花を手に取り、順番に棺の前に行ってそれらをお供えし、手を合わせた。お供えを終えた人々を、白服で身を包んだ女性たちが手を合わせながら迎え、参列者はその先にある甕に入った水で手を洗った。

その後、家族や親しい人たちだけで棺の前で写真を撮り、それが終わると、すぐに棺にガソリンが注がれ、火がつき、あっという間に、熱風を立ち上げながら、炎が高く燃え盛った。その時初めて、白い服を着た親族の女性たちが泣いているところを見た。少し経つと、まだ火が大きいうちに、親族も参列者

も帰っていき、あっという間に誰もいなくなった。火葬には時間がかかるそうで、お骨拾いや儀礼は後日行なうのだという。私は、どんどん小さくなっていく火をしばらく見ていた。

積徳行と人々の振る舞い

この2つの経験を通して、私は日本とは全く違うお通夜の様子に違和感をもった。懐かしい人との久々の再会に楽しくおしゃべりをするだけならまだしも、賭け事や儲け話に一生懸命になり、映画、よりもよってコメディ映画を上映することに私は戸惑った。私は故人とは一切面識がなかったものの、誰かの大切な人が亡くなったという事実に対し、遺族の悲しみに寄り添い、粛々とした気持ちで参列しようと思っていたが、ラオスの人々は生前の故人にまつわるエピソードを話すわけでもなく、ただ好き勝手に過ごして、おしゃべりをしている様子であり、私も含めた参加者の一部は、どのような方のお葬式に参列しているのかわからないままだった。

ところで上座部仏教を信仰する人々にとっては、善い行いによって徳を積むことが何より大事なことである。積徳行は、この世に生きる者が、僧侶を介して実施する喜捨を前提とした行為である。積徳行の文脈でみれば、生前故人と深い関わりがない人も、香典や供養、共食のための品々を持ち寄って、遺族が主催する儀礼に貢献し、僧侶を頂点とする儀礼環境の中で、自らの徳を積むことができる[林 2000: 224-226]。また、功德を介して死者を仏教的来世へと定位づける一連の葬送儀



写真2 棺に供える紙でできた白い花

礼は、死者の霊を悪霊化させないために、遺族以外の村人も参加して行なわれる集合的な行為である。そのような動機で集まった、必ずしも故人についてよく知るわけではない者同士の会話やコミュニケーションは、故人の思い出話より、世間話やカード遊びの方がスムーズに行なえる。

また、東北タイのラオ人社会²⁾では、死期が近い人の家に人々が集まり、当人をあたかも無視するように冗談を言い合う。そのような行為は、不謹慎であるどころか、遺族になろうとする人々への「思いやり」であるのだという [林 2000: 208]。ラオスのお通夜に参列していた40代の男性は、にぎやかなお通夜について、以下のように語る。

「カード賭博は、火葬する前に、数日間家の中にある遺体をみんなで寝ずに守るために、夜通し起きていられるようにやるのだよ。コメディ映画も、悲しく落ち込むのではなくて、笑って楽しく夜を明かすために流しているのさ。」

残された者に寄り添う

私が大学院に入学する少し前、突然祖母が亡くなった。友だちと卒業旅行に行っている時、母親から電話がかかり、何が起きたのかわからないまま、祖母が住んでいた秋田に向かった。祖母の葬式では、喪服を着た人たちが次々に参列し、母や叔父に小さな声でお悔

やみの言葉や励ましの言葉をかけていった。一方、私は、葬式会場の裏で、急遽取り揃えた喪服のあまりのピチピチさや、タイツだと思って買ったものがとても長いソックスだったことに周りを気にせず笑っていた。笑い声を聞いた参列者はなんと不謹慎な孫だと思ったことだろう。今にして思えば当時の私は受け入れ難い突然の出来事から自分の心を守ろうとしていたような気がする。しばらくして、火葬炉に遺体が入られ、燃烧していくのを待つ間、初めて現実と向き合い、やっと涙が出てきた。

当時、とても悲しいはずなのに、静寂な祖母の葬式でなぜ笑うことができてしまうのか、自分自身でも理解ができなかった。ラオスのお通夜に参加してみると、遺族への寄り添い方は、悲しみの共有だけではなく、冗談を言って笑い合ったり、にぎやかに過ごしたりすることも含まれるのだと納得した。個人的な思いであるが、祖母が亡くなった時、ラオスのお通夜のようなにぎやかさに囲まれていたら、ひとりだけでは到底受け入れることのできない出来事を前に、少し心が救われたかもしれない。しかし、いざ遺体が燃えていくさまを見ると、否応なくその現実と向き合わなければいけなくなる。ラオスのお通夜での笑い声や、火葬場での涙は、個人的な経験ともつながり、今も印象深く記憶に残っている。

2) タイ側に移住したラオの人々は、現在のラオスの前身ラーンサーン王国の建設と分裂による紛争から逃れてきた人や、18世紀以降タイのラタナコーシン王朝成立後に戦争捕虜として強制移住させられた人々である [林 1998: 686-687]。

引 用 文 献

- 林 行夫. 1998. 「『ラオ』の所在」『東南アジア研究』35(4): 684-715.
- . 2000. 『ラオ人社会の宗教と文化変容—東北タイの地域・宗教社会誌』京都大学学術出版会.
- 増原善之. 2003. 「第9章 文化」ラオス文化研究所編『ラオス概説』めこん.
- 安井清子. 2010. 「第2章 居住地の高度による民族分類—民族分布, 分類の方法, 分布状況」菊池陽子・鈴木玲子・阿部健一編『ラオスを知るための60章』明石書店.